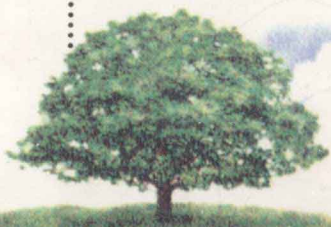


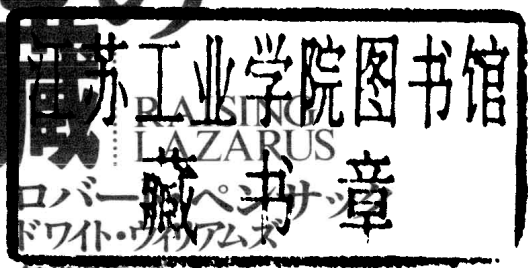
この
心臓
RAISING
LAZARUS
ロバート・ペンサック
ドワイト・ウィリアムズ
石井清子＝訳

生きる



時事通信社

こ
の
心
臓
と
生
き
る



石井清子一蔵

時事通信社

この心臓と生きる

発行＝1997年11月1日 第1刷

著者＝ロバート・ペンサック／ドワイト・ウィリアムズ

訳者＝石井清子◎

装幀者＝渋谷育由

発行者＝中村英一

発行所＝株式会社時事通信社

東京都千代田区日比谷公園1-3 〒100

電話東京03(3591)1111(大代表)

振替00140-6-85000

印刷・製本＝大日本印刷株式会社

ISBN4-7887-9735-6 C0095

Printed in Japan

落丁・乱丁はお取り替えます。

定価はカバーに印刷してあります。

日本の読者の皆さまへ

日本の文化には、内省の教えが豊かに息づいています。臓器移植の奇跡は、そのような文化をもつ日本においてこそ、もつともふさわしく、また高い評価をうけることでしょう。

私自身の生命が救われたように、大勢の日本の方の生命が臓器移植によって救われますように。

R・J・P

謝辭

この本を書くことで、私は数多くの辛い経験を再体験し、かつ浄化することもできました。ここにお名前を列記できなかった方たちも含めて、大勢の方のご恩を頂きました。その方たちは物語の中に登場して下さっています。

慢性の心臓病で苦しむ私に「子どもの面倒を見てあげましょう」と親切に申し出て下さった大勢の方たち——ミセス・ジュリー・ゲルフォンドとB M Hユダヤ教会付属幼稚園の職員の方たち、B M Hユダヤ教会の会員およびスタンレー・M・ワグナー先生、ミズ・サム・マスク、ミズ・リサ・クロウスキー、バーマン、ピーターソン、デコヴン、ペシュのそれぞれのご家族、特にヴィッキ、マイケル、クリス・キャリントンの皆様に限りない感謝を捧げます。

また、コロラド州スチームボート・スプリングスの人びと、および心からの深いお心遣いを頂いたルート・メモリアル病院のスタッフの方々に御礼を申し上げます。また、私の家族が辛い目に遭っている時に救いの手をさしのべて下さった、ラリーとマーギー・ブックマンご夫妻、ミス・アニー・ジェツクルに特に御礼を申し上げます。

精神的にぐらついていていた私を安定させるためにご指導下さったモーデカイ・トワースキー師とザルマ・トーネットの両氏に深甚なる謝意を表します。

親族——不屈の精神と忍耐を身をもって私に教えてくれた父ハーヴェイと彼の妻ジョアン・ペンサック、妹のローリー・ペンサックと夫のジョニー・ダーデン、原稿の整理を手伝ってくれた兄リチャード・ペンサック、いつも私を支えてくれた伯父夫妻ジュディとアーウィン・ペンサック——にも心から感謝しています。

温かい友情と懇切な批評を頂いた、マルクとオードリー・スモールご夫妻およびご家族に深く感謝しております。

さて、この本のおかげで私が手にした最高のプレゼントは、共著者ドワイト・アーナン・ウィリアムズとの生涯にわたる友情です。彼の文才は各ページにきらめいています。しかし私が最も心を打たれたのは、彼の愛と親切心でした。言葉では言いつくせないほど感謝しています。

何よりも大切な文章についてアドバイスを下さった私の代理人、マーク・ジョリーとアーサー・クレバノフの両氏にお礼を言わなければなりません——ありがとうございます。

私たちの原稿を読んだその瞬間から価値を認めて下さったバットナム社の編集者、ローラ・ヨークとアイリーン・コープのお二人に御礼を申し上げます。

素晴らしい序文で私を勇気づけて下さり、また個人的にもお世話になっている、トマス・スターズル博士に心から感謝しております。

最後に、本の中で語られている通り、勇敢かつ不滅の愛情でつくしてくれた妻アビーに心から「ありがとう」と言わせて下さい。

R・J・P

物書きが駆け出し時代に手に入れる最高のプレゼントは、穏やかな自信とそれに付随する出来事です。幸いなことに、私は大勢の人からこの贈り物を頂きました。中でも母、フェイス・ウィリアムズ・ハイクスと、その夫、J・R・ハイクスの愛と寛大な心は、私に自信を植えつけてくれました。兄ロッドとその妻キムの激励もありがたく、姉ジェニファーとテレサも大いに期待してくれました。その期待がいっつも私には重荷でしたが、今は御礼を言おうと思います。

数人の友人から文学上の意見および援助をして頂きました。そのおかげでこの本が完成したのです。ステイムボート・パイロット新聞社の皆さま——特にジョン・J・ブレナン、ジョアンナ・ドッダー、トニ・バフキン、スザンヌ・アンティノロ、デブ・プロパー、キース・クレイマー、シーン・キャラハン、ブラッド・ボルチュノス——に謝意を表します。この他、親しい友人たち——ステイヴとリンダ・コズラーご夫妻、エイミー・ウィリアムズ、ロブ・ハウス、トレース・リデル、ダイアン・ミーセン、マークとオードリー・スモールご夫妻、ディック・ゲッセゲン、リチャード・ペンサック、リサ・スキナー、ブルース・ダレイ、マイケル・ドウリアン、トマス・イースターリング三世——の各位に御礼を申し上げます。また、医学、文学の両面でご指導頂き、感銘深い序文を寄せて下さったトマス・スターズル博士に深甚なる感謝を捧げます。

ボブとアビィ・ペンサック夫妻にはこの上ないご恩を頂きました。このお二人の物語は、常に私の胸の内に住み、一生を通じて私を奮い立たせてくれることでしょう。

最後に、私たちの代理人、マーク・ジョリー氏と担当編集者のミス・ローラ・ヨーク、ミス・アイリン・コープに心から御礼を申し上げます。文学上の鋭い洞察力はその優しさと魅力にもひけをとるま

せんでした。それからハーバー・ブックマンにも感謝しています。

D
・
A
・
W

深い悲しみに打ちひしがれながらも
なお他の人びとを思いやり、
臓器移植という「生命の贈り物」を下さった
ドナーとご家族の方々に、
本書『この心臓と生きる』を捧げる

本書を、わが子マックス・ジェイコブと
ミリアム・ローズ、
そして愛する妻、アビィに捧げる
彼らのおかげで、ラザロは蘇った
R.J.P.

本書を、亡き
アーナン・ウィリアムズ(1932-1991)に捧げる
D.W.A.

序

『この心臓と生きる』——この本はそれぞれ異なった視点を持つさまざまな人に読まれるだろう。病気に罹ったことのない人たちは、ボブ・ペンサックの闘う姿を『巡礼者の進歩』という本の中の、背負い切れない重荷を負って死への旅に出されるキリスト教信者のそれと重ね合わせて、若い男性の雄渾な冒険物語と思うかもしれない。この重荷、つまり遺伝性の心臓病は、ボブが大好きな陸上競技の練習中に、また授業中に、そして最もプライベートな時にさえ、姿を現し、発作を起こす。時期はわからないが、この心臓病のためにいずれは死ぬ、と言われている。これでは死刑の宣告を受けて地下の独房に入れられたも同然である。地下牢から出ようとして、彼は牢の壁の亀裂を探す。牢から出るためには協力者が必要だ……医師、看護婦、家族、友人たちが協力者として本の中に登場し、去ってゆく。

恐ろしい臨死体験を何度も経験したら、それを撲ね返す力のない人は、押しつぶされてしまうか、気が変になるだろう。ところが、我がボブ・ペンサックは、そうなる代わりにペンサック医師になった。そして救急医、婦人科医などを経て、精神科医になり、彼自身の辛い体験を踏まえて治療の骨子とした。そして、戦場に馳り出されたり、その他の経験で生命を脅かされ、心を病んだ人びとの治療に当たっている。

彼も彼の患者も、ひどい恐怖感に襲われるが、これは臆病のせいではない。彼らは死を怖れてはいな

い。恐怖から逃れるには、死はたやすい方法なのだから。この人たちが怖れているのは、傷つきやすいことなのだ。健康な読者は、この辺りを読んで、ペンサックの経験についていけなくなるだろう。傷ついた事のある人は、混雑した商店街を歩いていても、授業中も、他人との間に肉体的、精神的にどのような距離をおいたかを思い出すだろう。彼らは自分を守る殻がひどく脆いことを知っているから、距離をおくのだ。

これはペンサック医師が明かした秘密の世界である。ペンサックはその中で闘った。まず生き残るために、そして正気でいるために。そしてその体験を治療に用いたのである。

またこの本は、一九六二年に幕を開けた、医学における臓器移植分野の発展を描いた歴史物語でもある。同じ頃、ボブ・ペンサックは遺伝による心臓病に罹っていると診断された。それから三十年の月日が流れ、臓器移植の方法が確立し絶頂期を迎えた時に、ペンサックは新しい心臓の移植を受け、生命を救われたのである。特筆すべきことは、拒絶反応抑制剤の研究のために働いたボブが、二十年後にその同じ拒絶反応抑制剤によって治療を受けた事実である。だが、この薬の研究室で働いていた一九七二年当時、ボブ・ペンサックは既に胸の中に時限爆弾を抱えていて、死に向かって刻々と時を刻んでいたことは、誰一人として知らなかった。秒読みに入った最後の段階で、機能の弱った彼の新しい心臓を復活させようと、徹夜で頑張った二人の移植医は、コロラド大学医学部で私が主任として指導した教え子であった。

ふしぎな巡り合わせはまだ続く。一九九四年一月、ボブ・ペンサックが私に電話してきた。「移植した心臓に対する拒絶反応が再発し、毎回貴重な身体機能が損なわれてゆく。その上拒絶反応抑制剤の服用量が増えると、新しく始まった人生の質が低下してくる。ところで先生方がピッツバーグで開発し

たが米国食品医薬品局の認可が下りていない薬（FK—五〇六）は、従来のどの薬よりも優れていると聞いたけれど……」。私は早速ボブ・ペンサックを診察することにした。何年もの間会っていないかった、この活力溢れる青年に会って、私は驚嘆した。新薬FK—五〇六への転換も無事に済んだ。二週間後、ボブは電話で良いニュースを知らせてきた——バイオプシーの結果は拒絶反応なし。「医師たる者、汝自身を癒す」の言葉の通りではないか。

この素晴らしい本は、ロバート・ペンサック博士の記憶を基にして、文才溢れる協力者、ドワイト・ウィリアムズ氏の言葉で書かれた。本書をひもとく人は、医学に関心があるうとなかろうと、その感動と教訓をいつまでも忘れないだろう。

医学博士 トマス・スターズル

スターズル博士は、ピッツバーグ大学医学部付属臓器移植研究所の創設者で、現在所長である。一九六七年、デューク大学のコロラド大学医学部付属病院で、初めて人間の肝臓の移植手術を行い、成功した。彼はアメリカの臓器移植の分野におけるバイオニアの一人であり、移植外科医としての記録「とまどう人びと」（一九九二年）の著者である。

目次

日本の読者の皆さまへ 1

謝辞 2

序 7

復活への序曲 15

墜ちた女たちの街

馬

65

生々しい傷

107

欲望の横断面

223

蘇るラザロ

261

あとがき(ボブとリチャードのその後)

342

訳者あとがき

344

われはいくさを、いくさの庭の戦士を詩に歌う

——ヴェルギリウス

『アエネイス』

われは死より蘇りしラザロ

すべてを語るために 戻り来たりし

いざすべてを語らん

——T.S.エリオット

「J.プラフロックの愛の唄」

この心臓と生きる

RAISING LAZARUS

by Dr. Robert Pensack & Dwight Williams.

Copyright ©1994 by Dr. Robert Pensack & Dwight Williams.

All Rights Reserved.

Japanese translation rights arranged with
the Authors & Scott Meredith Literary Agency, L.P. in New York
through The Asano Agency in Tokyo.